

靴の歴史散歩

110

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

2011年に、都留文科大学准教授山本芳美先生と共著で、『靴づくりの文化史—日本の靴と職人—』を、現代書館から出版させていただいた。その時山本先生から、明治初期の靴に関する史料、かなりの量の国立公文書館の収蔵コピーを頂戴していて、今も私の宝物である。

「靴づくりの文化史」には、直接利用されなかったが、日本の靴業の祖・西村勝三、浅草の靴業の祖・弾直樹の他にも、これまで一度も語られていないが、亀岡町3丁目在住の靴商・小林権七なる人物が居り、弾直樹とも関係ありそうなので、この機会に紹介かたがた考察しておきたい。

「国立公文書館アジア歴史資料センター
〈記述の年代〉明治7年～明治8年
〈件名標題〉小林権七 軍靴献上ニ付銀盃
下賜ノ儀

〈作成者名称〉□地事務局 内務卿 大久保利道

〈履歴〉東京府下商小林権七靴千足献上願前議ノ通御聞届相成右靴陸軍省エ相渡代価積リ致候処一足ニ付オヨソ一円十二銭五厘位ノ趣申越候就テハ惣計金千百二十五円程ニ相成候間成規ニ照シ銀盃一個御賞賜相成可御裁可ノ上ハ内務省エ致照会同省ニテ施行相成可此段相伺申候…(後略)

□地事務局長官 大隈重信
明治7年12月2日」

取り交した書類は、□地事務局、陸軍省、内務省と、十

通以上にもなるが、大隈重信、陸軍卿 山縣有朋、内務卿 大久保利通と、歴史上の人物生けるが如しである。

台湾出兵に向けた軍靴献納が、まったくの無償なら、何の問題もなかったろうが、安いとはいえ有料、献納実現までには、かなりきびしい、信用調査もあったようである。

献納された軍靴が、舶来靴だったか、はたまた国産靴だったか、大いに興味をそそられるところである。

因に明治5年の調査によると、亀岡町1、2、3丁目合わせて、靴の年間生産量85,200足である。明治初年の草創期、千足といえど生易しい数ではない。

調査報告書によれば、自宅、店舗各所に、常時5千足位の靴を保有し、西村、弾製靴所とも取引あり、というからかなりの財力である。あれこれ思案すればするほど、靴商というよりは、金融業だったのではないかと思われてならない。(この項続く)



明治25年頃、待乳山聖天より今戸橋を望む